



サクラソウ

## ◆宮沢賢治と植物◆ —サクラソウとマムシソウ—



マムシソウ

文教育学部教授 大塚 常樹

文学の中には、私たちがふだん考えつかないような発想が見いだされて新鮮に感じることがありますね。花壇設計師でもあった宮沢賢治は植物の性質を熟知していましたから、賢治作品の中には、植物をめぐる新鮮な発想がたくさん見られます。

最初はサクラソウです。サクラソウは桜の名前をもつように、濃い桜色の花をしています。桜はご存じのように、平安時代から盛んに和歌に歌われ、日本文化の象徴とも言える花ですね。江戸時代には「敷島の大和心を人問はば朝日にほふ山桜花」（本居宣長）と、大和魂の象徴にまでなりました。しかし、賢治はもちろん、新しい価値観や美意識を求めた萩原朔太郎、梶井基次郎、室生犀星などの近代の文学者たちはこぞって桜を性的な花とみなしました。よく考えれば花は生殖器であり、それが発想の転換の前提でしたが、桜が血祭に上げられたのは、伝統文化の象徴だったことに加えて、性的な色であるピンク（桃）色の花だからです。賢治の童話「若い木霊」をみてみましょう。寒天のように水気を帯びた春の大気の中で、若い木霊（こだま）は、上中から出てきた墓、かたくりの花の怪しい文様、やどりぎの実など、春の自然からさまざまな刺激を受けます。性欲は「鶺鴒の火」「もゝいろの火」で示されますが、サクラソウがつぶやく「空はすっかり鶺鴒の火になった」というひとり言を聞いたとたん、木霊の胸は「裂けるばかりに高く鳴り」だし、吐く息は「鍛冶場のふいご」のように熱くなります。つまり木霊の胸の中は「鶺鴒の火」で一杯になったのです。鶺鴒（とき）色は桃花鳥という別名をもつ鶺鴒の羽色から来た名前ですから、サクラソウも含めて、春は《ピンク（桃）色》の誘惑に満ちているというわけです。

もう一つはマムシソウです。「国立公園候補地に関する意見」という詩のなかで賢治は、噴煙立ち上る岩手火山（現在は八幡平国立公園に指定）周辺を地獄ワールドに仕立てて、地獄交響曲やら、えんま庁、胎内くぐり、三途の川などを作って、世界中の悪い奴らを集めてこらしめたい、という愉快なプランを提示しています。その中で実に効果的なのが、地獄ワールドの花壇です。そこには猛毒の朝鮮朝顔とトリカブト、それに加えて写真のマムシソウが植えられています。マムシソウは毒草ではありませんが、毒蛇のマムシに似ていますから、極悪人たちも震え上がって、改心すること間違いなしですね。